

---

# 十三夜

うすしお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三夜

### 【著者名】

つすしお

N52530

### 【あらすじ】

十三夜の月をめぐる、ぼくと彼女のシーン。

今夜が十三夜だというのを知らせてくれたのは、彼女の方からだつた。先月、十五夜を見に誘つたのはぼくの方だつたつてのに、当のぼくはそれをすっかり忘れてしまつていた。と言つのも、数日前の、ほんのささいな原因による、すれ違いが一人を遠ざけてしまつていたからだ。ずっとお互い連絡さえ取つていなかつた。

十三夜 豆名月とか栗名月とか呼ばれる秋の名月。必ず十五夜とセットで見なければならぬ、というのが古から続く絶対のルールだ。ぼくらはそのルールに則り、こうして鴨川の河原に腰掛け空を見上げている。気まずさを引きずりながら。

「十三夜はねえ、『拝めば成功がかなう』って言われてるのよ。

知つてた？」

彼女が言つた。ぼくはさつきコンビニで買つた日本酒の小ビンのキヤップをひねりながら「ふうん」と、力なくただ答えた。ぼくはくだらない意地を張つている。それが痛々しいほどに自分でも分かる。知つてか知らずか、彼女はそれを気に掛ける素振りをまるでしない。

「ほら」

彼女がお猪口を一つ差し出した。三条商店街のはしつこの陶芸教室に通つて作った彼女の処女作。十五夜の晩に初めて見たときは、まるでスマートからは程遠い出来だと思った。無骨で、不恰好。だけど今夜あらためて見てみると、これはこれで味があつていいものだと思える。

酒を注いで、それから小さく乾杯。

「成功に？」

ぼくのその質問は、彼女を困惑させようと発したものだ。ところが彼女は迷いもせずに笑顔で答えた。

「もちろん」

目的語のない、そんな言葉を信じじられる彼女のオプティミズム。思

えぼくが惹かれたのは、彼女のそんなところじゃなかつたつ。

彼女の顔を見ているぼくは、口元の笑みをもう隠せなくなつた。酒に一口つけてから、ぼくは彼女の手を握つた。秋の夜の冷えた空氣の中、確かに感じる彼女の体温。いくらかの、言葉にならない言葉なら、この体温を伝える鼓動が運んでくれる。ぼくらは会話をぜんぶ、そのつないだ手に任せて、十三夜の月をただ眺めた。

丸太町の駅まで彼女を送る途中も、ぼくはずつと彼女の手を放さなかつた。放してしまつのが怖かつた。彼女を失くしたら、ぼくは再びあの無味乾燥な生活に戻らなければならぬ。もともと社交的でもなく、将来に対しても希望も持たなかつたぼくは、彼女と出会つてからこの半年で、よつやく変わり始めている。彼女の笑顔がぼくの希望で、彼女の不在がぼくの絶望。

用なんて見てしまつたせいだ。手を放せば彼女があの用に帰つてしまつという、ありえない幻想にぼくはとらわれてしまつている。不意にぼくは足を止めて、手で彼女を引き寄せ、力任せに抱きしめた。彼女を逃がしてしまわないよう。ぼくの心をバラバラにしてしまわいために。このまま、ずっとといつまでもこのままで。腕の中、彼女の息が少し荒くなつて、彼女はあえぐよつとぼくに言つた。

「ちょ、力入れすぎ」

それでぼくは自分がありつたけの力を込めていたことに気付いた。あわてて手を緩めながらぼくは言つた。

「ごめん。でも思うんだ。この気持のうちのどれだけが届いてるんだろ？ つて。壊れるぐらゐに抱きしめても、それだけじゃとても足りないって気がする」

この言葉にしたつて、いつたいどれだけ届くつていうんだろ？ 彼女の服、皮膚、肉体を通り抜けていちばん深い所まで。そういう意味でなら、もしかしたらぼくはまだ彼女に触れてもいいのかも知れない。怖くて不安でたまらない。

「私の田を見て」

彼女が言った。その少し上田遣いの田をぼくはのぞき込む。彼女は年下のはずなのに、ときどきぼくの姉みたいな顔をする。ぼくはまるで悪戯を咎められた少年みたいに、田を逸らしそうになる。

「私の田に自分が映つてるのが見える?」

「まばたきを一、三度してから田を凝らすと、確かにぼくが映つていた。半分泣顔。情けないほど」。

「うん」

「じゃあ、その映つている自分の田の中には私が映つている?」

言われるままにぼくは彼女の田をじっと見つめる。この田の解像度でどこまで追えるか分からぬ。けれども確かなのは、映つていてに違ひないってことだ。ぼくは答える。

「きっと」

「分かつた?」この合わせ鏡はどこまでも続くの。ずっとずっと、ずっと深くまで。それがどんなに深くても、ちやんとあなたはそこにいる」

「」

ぼくは無言で再び彼女を抱きしめた。今度はほとんど力を入れていない。でもさつきと違つてはつきりと彼女の心臓の音を感じている。合わせ鏡の無限連鎖。ぼくの中の彼女と、彼女の中のぼく、どこまでも続いて途切れるのではない。彼女を抱きしめたままぼくが言おうとした言葉の、先手を取つて彼女が言つた。

「どういたしまして」

「ありがとう つて、え?」

「何を言おうとしてるか、ちやんと伝わったから。だから先に言ってみた」

だからぼくらは抱き合つたままで大笑い。ぼくの背中をパタパタと彼女の手が叩いている。ようやくぼくにも彼女の気持ちが伝わってきた。ぼくの奥底に語りかけるそれは、いつもの彼女らしい、明るく前向きな言葉だった。

『来年もまた一緒に月見するからね。絶対』  
十三夜の月は、満ち足りないままでも完成している。たぶんそう  
い「う」となんだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5253o/>

---

十三夜

2010年10月26日16時22分発行